

うつほ物語絵巻

田村, 隆

福岡教育大学非常勤講師 | 九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

<https://doi.org/10.15017/10526>

出版情報 : 文献探究. 45, pp.1-, 2007-03-30. 文献探究の会

バージョン :

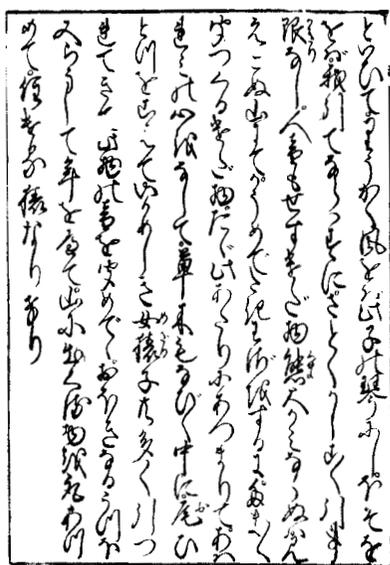
権利関係 :



解説

田村 隆

外題、「うつほ物語」。近世前期写(寛文頃)。卷子五軸。表紙は金欄に草花櫻文様。完本として残る五軸の絵巻は、他に天理図書館蔵久原文庫本しか存しない。俊陰巻のみから成り、本文に伴って奈良絵十九図が描かれる。「九州大学図書館蔵 細川文庫目録」(『語文研究』八、昭和三十四年二月)に「巻序は内容と矛盾するが、題箋の誤貼によるか。絵は彩色、巻一に三景、巻二に三景、巻三は五景、巻四に三景、巻五に五景あり」と紹介されるように巻序が乱れており、物語の進行に沿って並べ替えると、巻三 巻一 巻五 巻四 巻一となる。絵の場面は、「此木のうつほをえて、木のかはをはぎ、ひろき苔を敷などす」と書名の由来となる「うつほ」が示された後、上段の本文に続く。五行目から翻印すれば、



(万治版 53才)

りうかく風をば此子の琴にし、ほそををば我引てならはずに、さどくかしこく引事限なし。人音もせず、けだ物、熊、大かみならぬは見えこぬ山にて、かうめでたきわざをするに、たまく聞つくるけだ物、たゞ此あたりにあつまりて、あはれみの心をなして、草木もなびく中に、尾ひとつをこえていかめしき女猿子共多く引つれてきて、此物の音を聞めて、おほきなるうつほ又らうじて、年をへて山に出くる物を取あつめて住ける猿なりけり。此物の音にめで、時く木のみをもち子共も我も引つれてもてく。

とあり、俊陰女と仲忠の奏でる琴の音色に感じ入った猿達が、「時く(の)木のみ」を携えてやって来る様子が描かれる。

『うつほ物語』の奈良絵本・絵巻の本文には、古活字版に近いものや延宝版に近いものなど種々見られることが報告されているが(中野幸一編『奈良絵本絵巻集』3 『うつほ物語』(早稲田大学出版部、昭和六十三年)ほか)、本絵巻の本文は、万治三(一六六〇)年に刊行された俊陰巻のみの絵入板本に酷似する。掲出の部分においても、本文の異同は些かも見られず、字母や字配りに至るまでかなりの程度において一致する。字句の微細な相違は全体で十数箇所ほど散見されるが、絵巻には、「山のあるじ」(万治版十一ウ)を、「山の山のあるじ」、「女君」(同三十七才)を「女若」とする類の単純な誤写が認められ、先後関係としては絵巻本文がこの板本に拠ったと見るべきであろう。ただし、絵については板本とは全く異なる独自のものである。

尚、万治版については、同じく九州大学が所蔵する細井貞雄書入板本ならびに古活字版と共に、附属図書館ホームページにおいて画像データベースを昨年十月より公開中である(<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/kichosho/utsuho/>)。

(たむら たかし・本学専門研究員、福岡教育大学非常勤講師)